

平成 21 年 9 月 30 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007年度～2008年度

課題番号：19520492

研究課題名 (和文) 言語間におけるライティング能力双向性モデルの構築

研究課題名 (英文) Construction of a Model for Transferability of Writing
Competence across Languages

研究代表者

小林 ひろ江 (KOBAYASHI HIROE)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：50205481

研究成果の概要：

本研究では、日本語母語話者 (21名)、英語母語話者 (23名)、日本語学習者 (19名) の3グループから収集した63編のエッセイを分析し、提案した言語間のライティング能力双向性モデルがアメリカ人/カナダ人大学生の母語と外国語として日本語によるテキスト構築の過程とアウトプットを説明できるモデルであることを検証した。更に比較レトリックの観点から議論は日英語間に類似点は多いが、サブタイプ (論証型と探求型) やエビデンス (例、具体例) の使用に違いがあることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育

1. 研究開始当初の背景

一つの言語で文章がうまく書ける人は、他の言語でも同様にうまく書くことができるであろうという直感に基づいて L1 (第

一言語、母語) と L2 (外国語) によるライティングの関係について研究を過去5年間行ってきた。ライティング能力の L1 (日本語) から L2 (英語) への転移について

は、日本語小論文訓練のポジティブな影響を精査し、L2（英語）からL1（日本語）への転移については、海外留学でのライティング経験の影響を特定した。これらの研究を通して明らかになったことは以下の3点である。(1) ライティング能力は言語間で双方に転移する、(2) その転移には様々な要因が影響を与える（例、過去のL1 & L2 ライティング経験／訓練、ライティング知識の習得度、ライティング能力レベル、英語力、コンテキスト、個人の価値観、見方等）、(3) これらの要因がどのように関わるかによってL1とL2ライティングの特徴が重なる部分（オーバーラップ）の拡大や縮小が起きる。過去の研究では、日本人学習者を研究対象にしたが、ライティング能力の双向性モデルを構築し、検証するためには、他の言語をL1とする学習者を対象にするリサーチが必要であるとの認識に至った。なお本研究でのライティング能力とは論理力やライティング知識に基づきテキストを構築する力を意味する。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、英語母語話者（アメリカ人・カナダ人大学生）を対象に、L1（英語）からL2（日本語）へのライティング能力の転移について調べ、一般化できる双向性モデルの構築と検証を行うことである。過去の研究からライティング能力は言語間で双方に転移することが判明した。特に、議論文（または意見文）では、日本語であれ、英語であれ、議論の構築が重要であり、主張—賛成理由—（反論）—主張型の文章構成は両言語に見られる。と同時に「序論」と「結論」の構成要素には日英語間に違いも観察され、日英のテキストの特徴のどちらを選択するかは、書き手が過去に受けた日本語と英語ライティング経験

を基に形成したライティング観によることも分かった。このように、一つの言語でのライティング訓練や経験が他の言語によるライティングにも有効であることを指摘しつつ、一人ひとりの書き手はどのように自分の小論文を構築していくのか、というプロセスについても説明できるモデルを構築するのが目的である。

もう一つの目的は、比較レトリックの観点から、母語としての日本語と英語ライティング、特に、議論文の類似点と相違点を精査することである。過去、日本人学習者の日英語作文の分析を行ったが、英語母語話者による英語作文の分析を試みたことはない。英語母語話者による日本語作文の特徴を特定するためには、英語母語話者による英語作文と日本語母語話者による日本語作文の特徴を明らかにし、比較する必要がある。日本人の場合、できるだけ英語ライティング訓練を経験していないことが重要であると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 参加者

最終参加者数は、L1英語話者23名、L2日本語学習者19名、L1日本語話者21名である。L1英語話者の内訳は、アメリカ人20名、カナダ人3名であり、このうちの19名が日本語学習者を兼ねているので、実質的には、参加者数の総合計は44名である。リサーチへの参加はあくまでもボランティアに基づいた。

L2日本語学習者は、大多数（79%）が日本語専攻で、大学4年生（89%）であるが、L1日本語話者はほぼ全員（95%）が国語教育または初等教育を専攻し、15名が大学3年生、残りの6名は大学院生である。L2日本語学習者の日本語能力は、担当教師によると、中級レベル（12名）または上級

レベル（7名）であり、この評価は学習者の自己評価とほぼ同じであった。また日本での日本語学習経験をもつ者は3分の2に達するが、期間は比較的短く、1ヵ月から1年間の範囲である。日本語ライティング、とりわけ、エッセイ・レベルでの訓練／経験は北米の大学では全員が受けていないが、3名の学生は日本の大学でライティング授業を受けている。

(2) データ収集

① 課題

日英語の作文収集のために使用したトピックは前回の研究と同じである。一つは「老人と家族の同居の是非」、もう一つは「早期外国語教育の是非」についてであり、それぞれのトピックについて賛成または反対の立場・意見を明確に求める議論文の作成を求めた。できるだけバランスを保つために、それぞれの課題が半々になるように工夫した（「老人」31編、「外国語」32編）。作文作成は母語である英語を先に、外国語の日本語を2番目とし、辞書使用は認めた。リサーチ参加者は教室外で作文を作成し、現地の連携者に提出した。作文の長さの平均は、L1 英語が595語、L1 と L2 日本語はそれぞれ、1077字と672字であった。

② アンケート調査とインタビュー

アンケートは2種類である。一つは学習者の英語と日本語に関するライティング訓練／経験について（質問項目数20）。もう一つは日英語作文作成直後に行ったアンケートで、自分が書いた作文の文章構成や特徴、ライティング・プロセス、想定される読み手、英語と日本語ライティングの違い等について尋ねたもの（質問項目数34）。回答はすべて連携者を通じて電子メールで回収した。アメリカの当該大学を訪問した際に、5名の日本語学習者にアンケートへの回答につい

て詳細な面接調査を行った。

(3) データ分析

日英語テキスト分析は過去の研究(Kobayashi & Rinnert, 2004, 2007、科学研究報告書)で使用した方法を用い、①ディスコース・タイプ（主に議論文と説明文の区別）、②小論文構成、③議論文の反論、④エビデンス⑤結論、⑥序論について分析する。本研究では、議論文をより精査するために、Kara Gilbert (2006)が提案する三つのサブタイプを応用し、テキスト分析、とりわけ、マクロレベルの分析に使用することにした。以下にサブタイプの定義を示す。

提案型：書き手の主張／立場を論理的に支持しつつ、問題点にも触れ、問題解決のための提案を含む（提案はテキストのかなりの部分を占める）

論証型：反論や反駁によって他の立場を崩しながら、書き手の主張／立場の正当性を論理的に支持する。ただし、反論を入れるか入れないかは書き手の判断による。

探求型：話題に関連する争点を明らかにし、様々な見解から議論を進め結論（主張）を導き出す、または、表明した主張がどのように導き出されたのかそのプロセスを明らかにする。

4. 研究成果

テキストの分析結果とアンケート調査の回答を照合しながら、日本語学習者に焦点を当て主な結果をまず述べ、この結果に基づき言語間のライティング能力の双向性モデルを検証する。

(1) 議論文サブタイプの選択

与えられた課題に対し、3グループは共通して議論文を作成した。サブタイプの使用に関して学習者グループも論証型を頻繁に使うが、3人に一人（6名）は探求型を使った。この頻度は日本語母語話者より高い。

アンケート回答によると、6名中2名はトピックの影響を挙げているが、4名は日本語教科書や日本関連の本を通して日本語ライティング・スタイルに触れ、日本語的に書いたという。ある学生は、「日本語の書き方は、意見や主題を明確に述べず、循環的に文章を書いていくようだ」と述べている。興味深い点は、正式な日本語ライティングの訓練や経験がなくとも、「読む」を通して日本語文の一つの特徴が「書く」へ転移していることである。

一方、学習者の論証型については、英語作文で15名中11名(73%)が、日本語作文では18名中11名(61%)が使用したが、このうち7名はL1とL2の両言語に論証型を用いている。これはL1からL2への転移と考えられるが、その理由には二つある。一つは議論文は論理の構築であるから言語の違いにかかわらず同じであると考えられる積極的タイプ、もう一つは日本語でどう議論文を書くか知らないのでL1知識をそのまま使う消極的タイプ。以上のように議論文サブタイプの選択についてはL1からL2への転移と、学習の転移、つまり「読み」から「書く」への転移が起きることが分かった。

(2) 反論とエビデンスについて

議論文では主張を支える根拠ばかりでなく、対立する主張への反論やエビデンス(例、事実、具体例、専門家の意見等)を根拠の説得力のために用いることは重要である。まず反駁を含む反論について、日本語学習者グループの使用頻度(25%)は二つの母語グループに比べて低い(英語、60%;日本語、44%)。この結果は、留学経験をもつ日本人英語学習者と同じである(Kobayashi & Rinnert, 2007)。反論についての知識をもっても高度な言語能力が必要とされるためL2で書くのは容易ではない。日本語能力

の低い学習者は反論を入れないことを選択したと考えられる。

エビデンスに関しては、使用頻度とのエビデンス・タイプについて3グループの間に相違が見られた。①英語L1グループ(L1Eng)はエビデンスを最も頻繁に使用している(平均回数:L1Eng, 3.07; L2Jp, 1.64; L1Jp, 1.33) ②エビデンス・タイプの一つ、具体例の使用については、L1英語グループとL2日本語学習者グループはL1日本語グループの2倍の頻度で使用している(平均回数:L1Eng, 1.60; L2Jp, 1.45; L1Jp, 0.75) ③具体例に関しては、客観的タイプと個人の経験に基づいたタイプに分類したが、英語を母語とするL1とL2グループは共に客観的タイプを好む傾向であるが、L1日本語グループは個人的タイプをより頻繁に使用している(L1Eng:客観, 0.93, 個人, 0.67; L2Jp:客観, 1.09, 個人, 0.27; L1Jp, 客観, 0.17, 個人, 0.58)。エビデンスの使用は英語議論文では重要な要素として強調されているが、この特徴が結果に反映されている。日本語学習者のエビデンス使用はL1に影響され、L2に転移させたものであろう。

(3) 序論と結論について

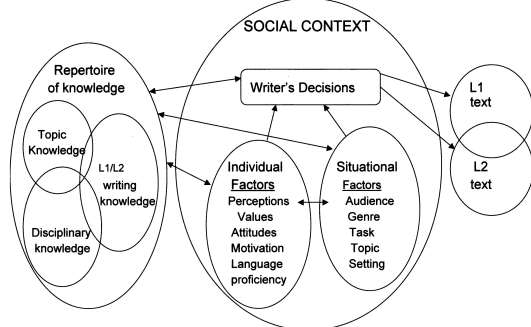
序論と結論の書き方に関しては、日本語学習者は英語L1グループや日本語L1グループと異なる傾向を示している。日本人がすべて明確に(100%)しかも序論の最初の文に意見表明をしている(71%)のに対し、学習者(33%)は日本語的な序論を自ら想定し、書き手の意見や立場を示唆するだけにとどめている。しかし一方意見表明の場合は英語母語話者と同じく序論の最後に行く。(L2Jp, 53%; L1Eng, 61%)。学習者は、日本語序論は主題や意見の表明が間接的であり、多くの場合質問を使うとの見方を示しているが、今回の調査では日本人は序論で明確に

意見表明を行っている。学習者が想定する日本語序論と実際の日本人が書いている序論にギャップがあることが判明した。

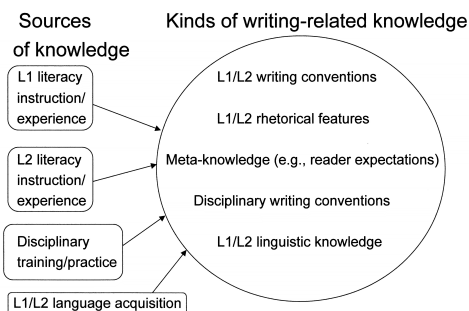
結論についても同様な傾向がみられた。英語の結論は意見の繰り返しと本論の内容を具体的にまとめる要旨で構成される。英語母語話者の結論はこの特徴を着実に反映している。一方、日本語学習者はこの英語的結論をある程度維持しながら、日本語的な結論（未来への展望や示唆を含む“Extension”）も頻繁に使用している（L2Jp, 50%; L1Jp, 57%）。このように、序論と結論に関しては、日本語の読解教材を通して観察しやすく、また部分的に取り入れやすいためか、その特徴を自分の日本語文章に含めている。これは転移させやすい特徴と転移させにくい特徴があることを示唆している。

（4）ライティング能力双向性モデルの検証
本研究の双向性モデルは論理力やライティング知識に基づき書き手がいかに母語や外国語でテキストを構築するかそのプロセスと最終プロダクトを示すものである。このモデルの中心は書き手であるが、三つの主要素知識の蓄え(repertoire of knowledge)、書き手の意思決定と選択、そして言語によるアウトプットから構成されている。今回の研究結果に基づき、2007年度の科学研究報告書で発表したモデルは、下記の図のように修正した。

Model of Text Construction



Repertoire of Writing Knowledge



以下は修正点と付加された部分である。

- ① 書き手の意思決定を明確し、その決定に影響を与える要因を、個人タイプ（見方、価値観、態度、動機、言語の量）と状況タイプ（読み手、ジャンル、課題、トピック、環境）の二つに分類した。これは、状況タイプのトピックや読み手観などの要因が書き手の議論文サブタイプの選択に直接的に関わっていたからである。
- ② ライティング知識を構築する知識の源を知識そのものと区別し、新しく追加した。更に以前は知識はライティング訓練や経験から得たものが中心であったが、今回は「読む」ことによってL2ライティングの知識を得ることが分かり、「読む」と「書く」を合わせる「リタラシー」した。
- ③ ライティング知識をより詳細に細分化した。母語や外国語のテキストの特徴ばかりでなく、読み手が何を期待しているか等のメタ知識も含めた。

次にこのモデルを使って日本語学習者のL1とL2テキストの構築について一例を挙げて説明したい。学習者Aは英語も日本語も論証型の議論文を使い、全体構成も、主張—支持理由—反論+反駁—示唆的主張と全く同じである。彼は過去の英語ライティング授業からこの構成を学び、彼自身この構成が自分の考えを明確に伝えられる最も効果的な論理形式であると考えている。この見方に従って英語の議論文の書き方

を日本語に応用している。つまり L1 から L2 への転移を可能にさせているのである。しかし両言語によるテキストの特徴が完全に一致することはまれである。彼の結論を見てみると、たったの一文で「～考えましよう！」と行動を示唆し、感情に訴えている。これは日本語は英語ほど表現能力が十分でないので簡潔にしたからだと彼はいう。この例の場合、書き手のアウトプットとして L1 と L2 のオーバーラップ部分は大きいと完全に一致はしていない。

以上、今回の研究では、言語間のライティング能力双向性モデルが日本人学生ばかりでなく北米大学生の母語と外国語によるテキスト構築の過程とアウトプットを説明できることを確認した。更に比較レトリックの観点から日英語による議論文には類似点が多いことが確認されたがサブタイプやエビデンスの使用に違いがあることも明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. Rinnert, C. & Kobayashi, H. (2009). Transferability of L1/L2 writing competence, in A. Stoke (Ed.) *JALT 2008 Conference Proceedings*. (査読有) Tokyo: JALT

2. Kobayashi, H. (2009). Task response and text construction across L1 and L2 writing: Japanese overseas high school returnees. 「人間科学研究」広島大学総合科学研究科紀要 (査読有), Vol. 3, 11-27.

3. Kobayashi, H. & Rinnert, C. (2008). Task response and text construction across L1 and L2 writing. *Journal of Second Language Writing* (査読有), 17 (1), 7-29.

[学会発表] (計 4 件)

1. Rinnert, C. & Kobayashi, H. (November 22, 2008). Transferability of L1/L2 writing competence, paper presented at JALT

(Japanese Association of Language Teachers), Tokyo.

2. Rinnert, C. & Kobayashi, H. (August 30, 2008). L1/L2 situated writing experience: Overseas high school returnees vs. non-returnees, paper presented at AILA (Association of International Applied Linguistics). Essen, Germany.

3. Katayama, A., Kobayashi, H. & Rinnert, C. (April 5, 2008). Transfer of discourse features: L1 English to JFL: A preliminary study of American JFL writers, paper presented at Panel on Second Language Acquisition, AJT (American Teachers of Japanese) Seminar. Atlanta, USA.

4. Kobayashi, H. & Rinnert, C. (September 16, 2007). L1/L2 Task Construction of Multicompetent Writers in EFL Contexts: Insights & Challenges. Plenary Speech at Symposium on Second Language Writing 2007, Nagoya Gakuin University, Nagoya.

[図書] (計 1 件)

Rinnert, C. & Kobayashi, H. (2009). Situated writing practice in foreign language settings: The role of previous experience and instruction in R. Manchon (Ed.), *Writing in Foreign Language Contexts: Learning, Teaching, and Research*. pp.23-48. Multilingual Matters: Bristol, UK.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 ひろ江 (KOBAYASHI HIROE)
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号: 50205481

(2) 研究分担者

リナート キャロル (RINNERT CAROL)
広島市立大学・国際研究科・教授
研究者番号: 20195390

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

片山 明美 (KATAYAMA AKEMI)
テキサス大学・アジア研究科・講師